

生活安全部門 ボランティア分野の活動

代表者：雲尾 周

構成員：加藤かおり、宮崎道名（客員助教授）

分野の目的

全国各地での災害後活躍するボランティアがクローズアップされ、活動したいという人も増えてきている。しかし、どのようなニーズがあるのかを把握すること、ボランティアをしたい人たちがすぐに行えるようにすることは簡単にはいかない。ボランティアについても災害時の一過性のものであったり、一度経験すればおわりということも多い。本分野では、ボランティア・ニーズを引き出せる人材、ニーズとボランティア希望者をマッチングできる人材を養成することを目的とする。また、本学学生の中で、大学卒業後も継続的ないし恒常的にボランティアに取り組む者が増えることを望む。

本年度の活動総括

宮崎客員助教授は、精力的に中越地方に出向き、市民会議やワークショップ等々に多数参加、被災地域の人たちとの関係作りを進めた。また、新潟大学学生の希望者数名を被災地のボランティアに引率するなどの活動も行った。しかし全体的には、小規模かつ断続的活動にとどまった。

活動計画

【学内】平成17年度ファシリテーター研修に引き続き、ボランティア・コーディネーター研修を行うこと、ボランティアの掘り起こしなどのイベントを行うこと。【学外】ボランティアに対するニーズ把握、被災地の子どもの交流活動。【総合】報告書作成・発刊

活動内容

活動の中核とするプロジェクト

災害ボランティアを中心とするボランティア・コーディネーターの役割開発及び人材育成

具体的活動内容

中越地区聞き取り調査、ボランティア関連団体懇談会（随時）、ファシリテーター技術育成研修会、ニュース発行（学内における広報活動を年3回程度予定）

活動実績・成果

スタディ・ツアーの実施：中越大震災から2年近くが過ぎ、被害の記憶が風化しつつある。しかし、いまだ復旧していないところも多い。その事実を見据えると同時に、復旧したところを見学して被災者の力強さを感じ、また、3年に1度開催される「大地の芸術祭」においても地域や自然の持つ力を体感できることをあわせて、スタディ・ツアーを行った。8月2、4、5、6日の4回で延べ学生11名、院生4名、教職員2名が参加した。参加者はデジタルカメラで自由に撮影してもらった。後日、写真を適宜貼りコメントをつけ、オリジナルアルバムを各自編集した（共同制作も含め全7冊を雲尾が保管）。

ニュースの発行：ニュースを作成し（A4両面1枚）、第1号・第2号は大学祭等で配布した。

第1号「中越・妻有小紀行 スタディ・ツアー 復興と芸術に会おう旅」2006年10月8日発行。

第2号「平成18年7月豪雨土砂災害の爪あと」2006年10月19日発行。

第3号「揺れる能登半島 緊急現地レポート」2007年3月31日発行（6頁、実物は右綴じ）。

業績等

●口頭発表

雲尾周：教育行政におけるボランティア支援のあり方、日本教育行政学会第41回大会、2006。



「震災による復興は終わった…」
「ボランティアは必要とされていない」
最近、こんな声が聞こえてきます。
しかし、本当にそうなのですか？
あなたの目で、耳で、五感で中越・越後妻有を学ぶ
現場を巡るツアーを開催します。
ぜひご参加ください。

参加者 募集中

定員：10名（先着順）

参加費：2500円（大地の芸術祭バスポート自己負担分）

申し込み締め切り：7月28日（金）16：00

申し込みはメールまたはFAXで

□災害復興科学センター ボランティア部門

雲尾研究室：Tel&Fax：025-262-7233

kumoo@ed.niigata-u.ac.jp

または、

□学びをつむぐ、引きだし屋 道屋

宮崎道名：Tel&Fax：025-261-3937

tt6m-myzk@asahi-net.or.jp まで

復興の夏 in 中越

芸術の夏 in 越後妻有

復興、そしてアートによる
地域の取り組みを巡る
スタディーツアー

2006.8.2（火）

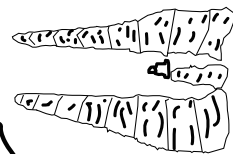
「こんなコースを
予定しています。」



新潟大学 8：30 出発



小千谷市被災地
めぐり



越後妻有
アート作品見学

新潟大学 19：00 着

復興・そしてアートによる地域の取り組みを巡るスタディーツアー
参加申込書

7月28日16：00までにFAXまたはメールでお申し込み下さい。

（ふりがな）
お名前：

〒
ご住所

学部・学年：
学籍番号：

電話番号：
（携帯電話）：

集合場所・時間：新潟大学西門 2006年8月2日AM8：15

FAXによる申し込みは、025-261-3937 または 025-262-7233（お間違のないように、ご注意ください）

お問い合わせ先：災害復興科学センター 宮崎まで（090-3006-8887）

復興科学センター
ボランティア分野

**復興の夏
芸術の夏**
2006.8.2(水)
2006.8.3(木)

復興、そして平和を
市民の心に残る
文化の祭典

2006.8.2(水)
2006.8.3(木)

会場：水戸市中央公園
入場料：大人 500円
小学生 200円
中学生 300円
高校生 400円
大学生 500円
7歳以下 無料

主催：水戸市、水戸市教育委員会
協賛：水戸市文化振興会
後援：水戸市議会、水戸市教育委員会
実行委員会：水戸市文化振興会
実行委員会事務局：水戸市文化振興会
実行委員会事務局：水戸市文化振興会

復興の夏・芸術の夏

筑波大学
University of Tsukuba
水戸市中央公園
水戸市文化振興会

新潟で、真剣に 「復興」と「ボラ」を考える

– 85 –

「今、起こっていること」を、 見て見ぬふりしてるの、誰だ？

復興科学センター ボランティア分野

ボランティア分野では、こんな活動をしています。

- 中越地震被災地と大学のコーディネート
- 学生ボランティアの活動支援
- スタディーツアーの開催
- ボランティア関連書籍の収集

などなど、復興ボランティアに関することなら
なんでもご相談にのります。

新潟大学災害復興科学センター

生活安全部門 ボランティア分野

E-mail: volunteer@gs.niigata-u.ac.jp

担当教員：雲尾 周（現代社会文化研究科）

加藤かおり（大学教育開発研究センター）

宮崎道名（客員）

新潟で、真剣に 「復興」と「ボラ」を考える



活動だより vol.2

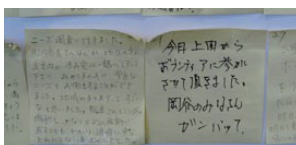
不定期発行 2006.10.19

当時は高速道路の橋げたがすっぽり埋まるほどの土砂に
覆われた道3丁目。
大量の土砂と岩石が集落を襲い、7名の命を奪い、多くの
家屋が被害を受けた。跡形も無くなった家の傍らには、
災禍を祈る花が活けてあった。

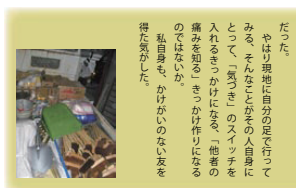


土石流災害は、水害と異なり、多量の土砂を運ぶ。その
撤去に時間がかかり、災害から3ヶ月経った今になって
ようやく床上げ・乾燥の作業が行われていた。住宅に被害
を受けた方の多くは、市営住宅などで復旧を待っている。

災害など緊急発生時、市役所など行政機関が義援金の配
分や物資の配分、そして生活再建の補助役を担う。また、
道路や公園などの公共空間も市の担当だ。ただ、査定な
どの手続きは時間がかかることが多い。



「今すぐ必要なこと」…災害当初から活躍するのはやは
り自衛隊、消防、警察、そしてボランティアである。岡
谷市には6000人を超えるボランティアが県内外から
集まった。また、ボランティアセンター運営は、民間の
非営利団体や社会福祉協議会、そして有志のボランティ
アで行われる。活動物資代や電話代や機器類運営資金な
どは赤十字や日本財団などが出資することが多い。



「ボ」に初めて行った人
「気付きのスイッチ」
私の友人が、この夏初めてボラ
ンティアに参加した。タマで本
業をし、その夜間、ボランティア
活動拠点を設けた。また、2
ダンファ現地に到着した。その
だ、友人の中心は、初めその想
いに賛同し、このボランティア
で特別だと思つた。当たり
前のことを当たり前にやるだけ
なんだと、帰り道の車内で語つ
ていた。
それから数日、とある毎に災
害のニュースが流れているよう
だった。
やはり現地で自分の足で行つて
みる。そんなときその人自身に
とって、「ボ」のスイッチを入
れるきっかけになる。「他者の
痛みを知る」きっかけになる
のではない。
私も多分、かけがいのない友を
得たがした。



長野県岡谷市津地区。
撮影日 18.10.16
3ヶ月経っても、家の残骸が残
っている。

やっぱり 復興は これから

忘れてない？
私たちのこと。

平成18年7月豪雨
土砂災害の爪あと

文章・写真 宮崎道名

前号で少しだけ触れたが、今年の夏も
各地で豪雨による被害が相次ぎ、多くの
地域が復興に取り組んでいる。
当時はその被害の甚大さから、メデ
アにも大きく取り上げられ、多くの関心
を集めた。だが、数日に移らしている我々
にとって、その後を知る機会には少ない。
そこで、7月の集中豪雨で大雨降った石
流災害を覚えた長野県岡谷市津地区は、
行方不明者が多数出た岡谷市津地区は、
当初立ち入り禁止区域で、ボランティア
活動も十分にを行うことが出来なかったと
ころである。
岡谷市は古くから豪雨で来るとは聞か
る。諏訪湖の北側を流れる国道と並行し、
南側の旧街道に沿って、津地区は、小
さな山の斜面に張りついていた。家が
並んでいる。諏訪湖までの距離は集まっ
たところでも100mもない。また、
山といつても、それほど高い山ではな
い。いわゆる山岳地帯のような圧迫感
は無く、私が訪れた10月には、杉の
緑が濃く、穏やかな諏訪湖とともに
心地よい空間を作っている。
しかし7月の豪雨で、その様子は一
変した。道路が水はたけを流れて
いない沢や、側溝に、大量の土砂や岩石
が鉄砲水とともに流れ込んだのだ。そ
れだけでなく、一瞬にして、住宅を埋
めるほどの土砂が、この地を襲った。
痛々しく倒れた小さな家の木々、
住宅の跡地と思われる幾帳の中にある
。直撃を受けた現場では、その爪
あとと、恐ろしくも実態を感ずる。
さらに下流に歩いていくと、どこも
まるで二丁ワンのように住宅の建
築がフシである。だが、車を路上に
する業者の人影があつても、本来ここ
で暮らしている人たちの姿はまばらで
ある。被災された方々の多くは、市営
住宅などの仮の住まいでも暮らして
いるのである。
幾多の苦しみや悲しみを乗り越え、
この地区がかつてのようになり取り
戻すまで、どれほどの時間がかかる
のであろうか。そんな中、私たちは何
ができるのか。どんな応援、いや、そ
こから学ぶことは何なのか。今、この
ことが問われているのである。

新潟でまじめに「復興」と「ボラ」を考える

ボランティア分野

活動だより

新潟大学災害復興科学センター
生活安全部門 ボランティア分野情報誌

3

2007.3.31

で自由にお持ちください。

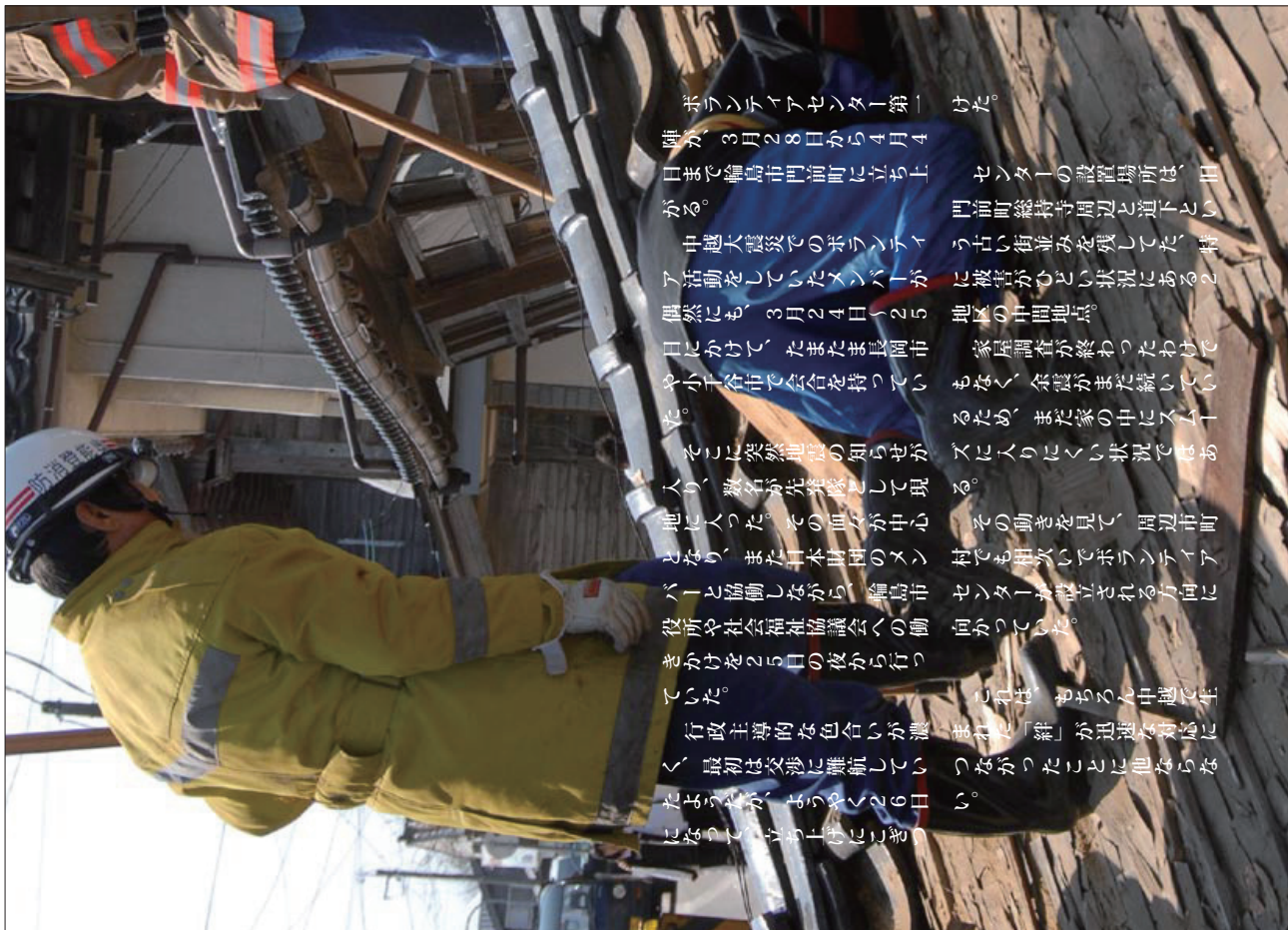
揺れる能登半島

緊急現地レポート

文責・写真・レイアウト
週刊：宮崎道名

今、見えること

平成十九年三月二十五日午前九時四十二分頃、
能登半島でまた、大地が揺れた。
そして痛々しい傷跡が静かな街に残っていく。
一日でも早くその傷を消せるのは、
まぎれもなく、私たち一人一人の力なんだ。



ボランティアセンター第一
陣が、3月28日から4月4
日まで輪島市門前町に立ち上
がる。
中越地震でのボランティ
ア活動をしていたメンバーが
偶然にも、3月24日と25
日にかけて、たまたま長岡市
や小千谷市で会合を持ってい
た。
そこに突然地震の知らせが
入り、数人が先陣隊として現
地に入った。その面々が中心
となり、また日本財団のメン
バーと協働しながら、輪島市
役所や社会福祉協議会への働
きかけを25日の夜から行っ
ていた。
行政主導的な包合いが濃
く、最初は交渉に難航してい
たようだが、ようやく26日
になって立ち上げにきこ

けた。
センターの設置場所は、門
前町総持寺周辺と道下とい
う古い街並みを残していた、特
に被害がひどい状況にあるこ
地区の中間地点。
家屋調査が終わったわけ
もなく、余震がまだ続いてい
るため、まだ家の中にスミ
ズに入りにくい状況ではあ
る。
その動きを見て、周辺市町
村でも相次いでボランティア
センターが設立される方向に
向かっていた。
これは、もちろん中越で生
まれた「絆」が迅速な対応に
つながったことに他ならな
い。



周辺の震度6の地域は、海側
の点在するいくつかの集落にお
いて、瓦や墓石、塀などは壊れ
てはいるものの、家屋の中の片
付けは自力で順調にされている
様子である。
ライフラインもそういった集
落とは回復しており、取り残さ
れた感じはあまりない。
田畑も一見しただけだが、大
きな亀裂などもなく、井戸端会
議やのんびり農作業をしている
人たちの姿も目立った。能登半
島の西側は、輪島市までそのよ
うな状態が続いている。しか
し、どこの集落も高齢化してい
るのは中越の時とあまり変わ
りはない。ただ、海沿いを走る道
には切り立った崖が多数あり、
天候や余震などにより、道はい
つ断されるかわからない状況
ではある。

今、ここに必要なものって何？
これから、ここに必要なものって何？



これからしばらくの間、
話しを聴く人、
片付けを手伝う人、
様子をたえず見守る人、
あたたかく自立を支える人、
たくさん必要です。

もちろん、
被災者を支援する義援金や、
ボランティアを支える活動基金なども、
復興への大きな支えになります。

一般に、
復興には20年以上かかると言われています。

被災地にとって、
忘れられることが一番悲しいこと。

つなげていきましょう。
あなたのキモチとココロを誰かに。



新潟大学災害復興科学センター
生活安全部門・ボランティア分所
volunteer@gs.niigata-u.ac.jp
玉尾 周（大学院副学長文化科学研究科助教）
加藤かほり（大学院教育開発研究センター助教）
宮崎道希（G&I助教）



中越で生まれた「絆」

芒種庵を作る会

災害現場に駆けつけたとき、「絆」という文字の入ったシャツやトレーナーを着ている人を見かけることがある。
ちよつとだけ、その秘密を明かしておこう。

芒種とは・・・

「芒種」 芒（のぎ）のある種をまく時期

「芒」 イネ科の植物の花の外殻の針状の突起

『繻質でまっすぐ伸びる「イネ科」の植物の、大事な花穂を守る繻のようだから』
というのは、被災住民の気質をも「イネ」をきくものであり、その種を育く、というのは、まさに復興をイネ「う」せせるものである。



3人の子どもたちが、地震で尊い命を奪われた小千谷市塩倉集落。
きこえの子どもたちが主から村人を見守っているとの願い。
まだ、やむを得ず村を離れる事になつてしまった人達も気鬱に立ち替れる場所を築きたいという願い。
そして塩倉に想いを寄せてくれた多くのボランティアの方々もまだ立ち替つてもらいたいという願い。
地域のコミュニティを維持し、苦境の中から生まれた人々との「絆」を、
なげ、塩倉に復興の種を蒔く。それが・・・「芒種庵」である。

<http://soiga.com/mati/shiodani.php> より引用。